
進め！北区中央図書館レジスタンス

おかむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

進め！北区中央図書館レジスタンス

【Nコード】

N1292Y

【作者名】

おかむ

【あらすじ】

四大元素細菌と呼ばれる未知の細菌のパンデミックによって、他国からの干渉を受けた日本。時は流れて、事実上連合国の手に落ちた日本では仮初の平和を甘んじて享受していた。

至って普通の高校二年生、宮本大輔は何も変わらない日常を憂い、只々過ぎる日々をそれとなく過ごしていた。ある日、考えてもいなかった事件に巻き込まれ、自らの力に目覚め戦火に身を埋めることとなる。近未来SF物語？

日常（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・初投稿作品で、誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点があるやもしれません。

↓指摘していただければ嬉しいです。

・SFを謳っていますが、そこまで科学的な知識に富んでいる訳ではないので、かなり拡大解釈等がありますのでご了承ください。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものです。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

日常

四大元素細菌。

後にそう呼ばれることになる人類史上最悪の病原菌は突如として人々に襲い掛かった。

確認できる最初の感染者は、細菌研究を行っていた著名な日本人医学博士だったとされる。

彼はとある研究の最中、全くの偶然から四大元素細菌の開発に成功する。

そして、奇しくも自ら最初の感染者になってしまう。

細菌の開発から数日後、彼は突如として肉体を水泡と化し帰らぬ人となる。

彼の死から数日のうちに細菌は、人から人へその毒牙を向けていく。

何よりも最悪だったのがその悪魔が、爆発的な感染力を持っていたこと。

接触感染を主な感染源とし、東京の研究施設から徐々に魔の手を日本中へと向けた。

一週間もせずに日本国民の四分の一が感染者となり数日のうちに死していった。

一月もせずに、国家領土の半分がゴースタウンと化した。

パンデミックと表現するには余りに被害が甚大であった。

民衆は混乱し、政府はその機能を失い、マスコミは隣国のバイオテロを謳った。

事態がようやく動いたのは、博士の死から三ヶ月も後のことだった。

「さて水菜さん、博士の死から三ヶ月後にどんなことがあったかわかるかな？」

「はい。国際連合の救済支援措置によって我が国は、国家機能を回復し現在に至ります。」

「うん、そうだね。いい答えです。」

国際連合の救済支援措置。

それは、教科書どおりの模範解答だった。

事態を重く見た各国は、四大元素細菌の研究に乗り出す。

そして細菌に対して、高温の——それも人体を一瞬で溶かすほどの——熱風が有効であることを突き止める。

結論から言えば、それは都合のいい侵略行為だった。

超高温の熱風を生み出す兵器など、そう多くは無い。

端的に云えば、大量破壊兵器の使用が、紛れも無い事実だ。

教科書にはそんな事は一遍も書かれていないが、この教室にいる生徒は勿論、五年前に生き残っていた全ての人類がその事実を知っている。

それでも、知らないふりをし、その紛い物の史実を享受するしかないのだ。

ここは既に、独立国家日本国ではないのだから。

「火山さん、じゃあなんでこの細菌が四大元素細菌と呼ばれているか答えられるかな？」

「はい。四大元素細菌の感染者が、四元素説における水、火、土、空気化し死亡するからです。」

「うーん、それだと半分正解、半分不正解って感じかな。正確には水泡化、人体発火、人体の硬化、人体の崩壊の四種類の死亡状況を四元素説に見立てているって感じね。まあ本当は、最後の人体の崩壊つてのも諸説あるんだけどね。」

最初の感染者である医学博士は、ここで云う水泡化で亡くなっている。

本当に人体が液体になってしまうそうだ。

人体発火も同様で、急激な体温上昇とともに体から青い炎が上がるという。

人体の硬化に関しては、かなり便宜的な解釈がされている。正確に表現しようとするならば、その硬さまさに土を固めた―それも超高硬度の―壁だという。

最も謎に包まれているのが、人体の崩壊。

風化や喪失などとも呼ばれるとおり、まるでそこに何もなかったのかのように消滅してしまうそうだ。

従って死体の確認も儘ならず、今日までその全てが謎に包まれている。

兎にも角にも日本は、この得体の知れない細菌によってだけでなく、連合国と称される侵略者達によって蝕まれている。

そして多くの日本人がそれを享受し、現状に甘んじているのが現代日本の姿だ。

誰も何もしようしない世界で、自ら行動を起こさない者が取れる選択肢は一つしかない。

――傍観者。

そしてそれが力の無い者なら尚更の事だった。それが例え無知ゆえの無力さだとしても――。

「ちょっと大輔、真面目に授業受けなさいよ。」

「ちゃんと聞いていたさ。今日は遅刻もしなければ、授業中寝てもいい。それでもまだ文句があるってのか？」

板橋区立竹園高校二年生になって最初の授業が終わった。

前々日に始業式を終え、今日から本格的に授業が再開していた。と云っても最初の授業ということで、その殆どが一年次の復習やこれから学んでいく内容の確認といった形式をとっていたが。

その新しいクラスでの生活を本格的に始める日に、教室の後方で

一組の男女が何やら言い争っていた。

「そうやってあんたは、聞いた振りしてずーっと上の空だったじゃない。」

「とんだ言い掛かりだね。大体、今日の授業なんて聞くに値しない去年の復習だったじゃないか。」

「ほらー、やっぱり聞いてなかったんじゃない。」

どうやら口喧嘩では、少女のほうに分があつたらしい。

ぎくりとした表情の少年に少女が畳み掛ける。

「どうやらまた父さんに言いつけて叱って貰うしかないようね。」

「そっ……それだけは勘弁してくれよ。また生傷一つ増やすきか？」

「お昼。」

「は？」

「お昼ご飯、あんたの奢りね。」

少年は怒りの表情を必死に抑えながら、後ろポケットから財布を取り出す。

残金は……六百四十円。

「三百円でどうだ。」

「五百。」

「三百五十……三百九十で手を打とう。」

「はあ？あんた馬鹿？あたしが五百って言ったら五百なのよ。分かる？」

「クソッ……約束だぞ、親父には内緒だからな。」

どうやら少女の圧倒的勝利で交渉が成立したようだ。

「分かってるわよ。じゃあそういうことで授業終わったら食堂ね。来なかったら殺すわよ。」

「……はい。」

授業始めでもある今日は、午前中で授業が終わる。

即ち残り三つの授業を残して、少年の昼食が決定した。

この学校の食堂で百四十円以下で買える物は、焼きそばパン以外

には存在しない。

「じゃあ次の授業こそちゃんと受けなさいよ。」

と云って少女は少年の目下を後にした。

（はぁ……今日はこれから三時間も授業か。）

適当にやり過ぎすつもりで出席した拳句、こんな目に会い少年は、残り三つの授業を真面目に過ごすという苦行を強いられ、心底途方に暮れていた。

存外真面目に聞いてみると、授業という物は得てしてどうってことない内容ばかりである。

終業ベルが鳴るまで残り十五分。

「今日は、最初の授業だしこの辺で止めておこうか。」

中年教師のやる気の無い声が教室内に響く。

同時に教室が歓喜に満ちる。

「ただし……ベルが鳴るまでは、教室から出ないこと。」

即座に教室が溜息に満ちる。

それは勿論、少年もまた同じく。

「よう、大輔。今日も嫁さんにたっぷり叱られていますな。」

「幸正……お前はいつになったらその嫁さんてのを止めてくれるんだ？」

真田幸正は少年の一年次よりの同級生で、よく話していた一人だ。活発で人当たりも良く、クラスを中心として全員を引っ張っているタイプだった。

運動神経も良く、陸上部の短距離エースとして、都大会準優勝まで果たしている。

基本的には放課後は部活で忙しかったため、行動を共にするのは主に校内のことだった。

「真田君……こればかりは仕方ありませんよ。宮本君は火山さん

には敵いませんからね。」

弱弱しい声で真田に話しかけてきたのは、同じく一年次よりの級友、東大井学だった。

幸正とはまさに正反対の人柄で、温厚柔和で趣味は読書という典型的な日陰タイプだった。

ただ勉学の面では校内でも五指に入るほどで、ひょんなことから幸正と大輔に勉強を教えて仲良くなり今に至る。

「学まで……そもそもあいつは、兄妹みたいなもんなんだよ。」

「そうよー。勿論私が姉の方けどね。」

「おい、京子……云つとくけど俺のほうが身長が高い。だから俺が兄だ。」

「はあ？あんたホントに馬鹿ね。これだから知性も品性のかけらも無い『愚弟』は嫌なのよ。」

「なつ……てめえ!？」

「ねえ明日香もそう思わない？」

男三人の雑談に京子に加わってさらにややこしくなってしまった。

「わっ……私は……その大輔くんも京子ちゃんもとってもいい人だと思います。だから……その……喧嘩しないで……ください。」

やけにモジモジした話し方をするのが、大輔や京子の幼馴染である南雲明日香だった。

二人がいるからこの高校に入学したというくらい極度の人見知りで、幸正や学と普通に会話出来る様になったのもつい最近のことである。

ただ、彼女の言葉には不思議な力があるようで、彼女にこう云われては、大輔も京子も身を引くしかなかった。

「さーて、イチャイチャも済んだことだし……」

「幸正ッ」

「真田ッ」

「昼飯食いに行こうぜ。」

二人の間髪入れぬツツコミもお構いなしに幸正は続けた。

頃合を計ったかのように終業を知らせるベルが鳴る。

教室にいた生徒達は、そそくさと帰り支度を済ませ教室を出て行く。

同じようにして五人も教室を後にするが、向かうのは昇降口ではなく地下食堂の方だ。

幸い午前授業の影響かいつもは生徒で溢れる食堂も今日は閑散としているだろう。

「あたし、Ｂランチね。」

「……はい。」

大輔の財布から五百円玉が券売機に投入される。

ボタンを押し食券をとるのは、勿論彼ではなく京子の方である。

「俺は焼肉定食にするかな。」

「じゃあ僕もそうしましょう。」

幸正と学も同じ様に五百円玉を券売機に投入し、食券をとる。

明日香は焼き魚定食にしたようだ。

一方、大輔は一人寂しく食堂に併設された購買にて焼きそばパンを購入している。

二十一世紀中期の現代に措いても格差社会の根絶は難しいようだ。各々がそれぞれの食事を持って席に着く。

「よしっ、それじゃあ……いただきます。」

この五人の中では、通例として幸正が食事の挨拶を務める。

「いただきます。」

同じ様にして大輔を除く三人も続く。

「……いただきます。」

一人浮かない声色の大輔も追従する。

「おやおや、元気がありませんねー。」

「つたく、折角の昼飯がこうじゃまずくなるぜ。」

「だってしょうがないだろ……見るこの焼きそばパンを。俺の昼飯は焼きそばパン一つだぞ。」

と云って数口で焼きそばパンを片付ける。

「グスン……俺もまともな昼飯を食べたかったぜ。」

あえて嫌味っぽく京子の方に視線を傾ける。

「ホントあんたってば、小さいことをいつまでもグダグダと煩いわね。」

教室の続きが始まりそうになったのを見かねて明日香が口を開く。

「そっ……そういえば……一時間目の……歴史のじゅっ……授業で……明日、復習の……」

「そう云えばテストをやると仰ってましたね。」

遮る様にして学が口を挟むが、この場合明日香にとっては助け舟になる。

「えっ、ホントに!？」

「やっぱりアンタってば、全然聞いてないじゃない。」

「てめえはいつまでも同じことを……」

「それじゃあこの後図書館で勉強でもいいかがです?」

さすがに面倒になった学が二人を無視して話を進める。

「おっ、そいつは助かるぜ。ちょうど今日は陸上部も休みだし、折角だから学や明日香に教えてもらおうぜ。なあ大輔?」

「えっ……ああ、じゃあ俺は一度家に帰って飯食ってきてもいいか? 腹が減つてもたないよ。」

確かに健全な男子高校生の胃袋を焼きそばパンは満たしてくれなかった。

「あっ……大輔、これ食べ切れなかったからあんた食べなさいよ。」
「えっ!？」

珍しく京子から施しの言葉を聞き、大輔は拍子抜けしてしまった。京子が頼んだBランチは板橋区立竹園高校の名物メニューで、男子生徒でも食の細い学などは食べきれないぐらいの量がある。

Aランチと同じ値段でほぼ二倍の量が味わえ、『四六時中腹を空

かせた狼共』と称される無骨な運動部系男子生徒や、『ピザデブ』と称される大食漢男子生徒に絶大な人気を誇っていた。

それを京子が頼んだのだから、周囲はよっぽどお腹が空いていたのだろうくらいに考えていたが、どうやら違ったようである。

しかしながらその事実に気づいて、ニコツとした笑顔を浮かべたのは明日香くらいなものであった。

当の本人の京子は少し頬を赤らめて、トレーを向いに座る大輔に差し出す。

「ありがたく食べなさいよね。」

「ったく、食いくれないなら最初から頼むなよな。まあこの場合は、素直に礼を言つとくよ。ありがとうな。」

「うつ……うつん。」

二人のぎこちない会話を耳にして明日香はますます笑顔になっていく。

勿論そのことには、鈍感な男共は気づくはずも無いのだが。

「なっ……なにニヤニヤしてんのよ。」

「うつ……うつん。なんでもないよ。」

幼馴染として小学生の頃から大輔と京子を見てきた明日香は、いつもと変わらない二人の様子を見てますます顔がにやけてしまった。(ほんと……二人と……もけっ……喧嘩する……ほど……仲がいいなあ。)

無事昼食を終えた一行はそのまま最寄の、北区中央図書館へと向った。

板橋区立竹園高校は、名前の通り板橋区に学舎を構えているが、その場所は帰宅との区界に位置している。

だから板橋区は勿論だが、多くの生徒が北区からの通学生でもある。

五人はその北区からの通学生であるため、帰路の途中にある北区中央図書館を勉強会場とした。

校門を後にし、自転車で駆ける。

くだらない冗談や軽口、噂話や色恋沙汰……数えればきりが無い程の自由があった。

ただ、それは虚構の中の自由にしか過ぎず、誰しもが苦い過去を必死に取り繕って忘れようともがいているだけだった。

だってそこにはいつもと変わらない日常があったし、誰一人としてそんなことを考えてもいなかった。

いや寧ろ考えないようにすることで、目の前に聳え立つ圧倒的な現実を回避したかったのかもしれない。

奇しくも今日、この日大輔達の戦いは始まってしまったのだから。否が応でもこの現実には立ち向かわなければならなかったのだから。

過去【一】（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・初投稿作品で、誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点があるやもしれません。

↓指摘していただければ嬉しいです。

・SFを謳っていますが、そこまで科学的な知識に富んでいる訳ではないので、かなり拡大解釈等がありますのでご了承ください。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものです。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

過去【一】

十五年前。

都内某所細菌研究施設。

後に”悲劇の幕開け”とも呼ばれる全ての出発点。

「クソッ……施設内は研究者どころか職員まで全滅か。」

「山本隊長、こっちもです。全員が訳の分からない死に方をしていきます。」

後に博士の第一発見者として、一部の自衛官や政府要人にその名を知られることになる山本大和は困惑していた。

若干二十七歳で自衛隊の秘密工作部隊の隊長職を任された大和は、原因不明の変死事件に関し原因の究明を命じられてこの研究施設を訪れていた。

彼が隊長職に任命されたのは、対人格闘術や武器使用技術に優れ、隣国の工作活動に対して一定の成果を挙げていたということもあるが、何よりもその医学の知識が評価されていたことだった。

そのこともあってか、大和が率いていた部隊がこの施設を調査することになったのである。

「あとは、一番奥の博士の部屋だけか……。」

廊下に無残に置かれた死体は見るに耐えない姿をしていた。

「最初に云っておくが、ここに足を踏み入れた以上生きて帰れる保証は無い。そのことは覚悟しておいて欲しい。」

「今更、何云ってるんすか。隊長の部隊に配属された時から覚悟は出来てますよ。」

「吉田……まるで人をどこかの鬼軍曹みたいに云いやがって。今日の焼肉はお前の奢りだからな。」

「えゝっ！？そりやないっすよ。」

緊張した隊員達の間、笑顔が生まれる。

このどこか頼れる兄貴分的な所も大和が隊長に抜擢された一つの

理由だろう。

「さあ、気を引き締めていくぞ。この部屋がメインディッシュだ。」
木目の美しいの扉を脚で押し開ける。

隊員達の間には再び緊張が走る。

「こっ……これは!？」

「隊長……こいつは一体どういうことです!？」

大和を含む特殊部隊の面々四人は眼前に広がる光景に息をのんだ。
そして生まれて初めて見る得体の知れない異物に、瞬時に畏怖の
念を抱く。

「これに手をつけるのは後にしよう……。俺達が軽々しく手を触れ
ていいものじゃないかもしれない。まずは手がかりになりそうな研
究資料を探せ。」

心なしか大和の声が大きくなる。

(ちくしょう……なんだってこんな……)

隊員達は一先ず目前のそれを詮索するのを止め、室内に散らばっ
た資料を手当たりしだに確認し始めた。

後に博士の死体であると結論付けられた水泡化死体は、まるで死
の直前まで博士がそこにいたことを示すかのように椅子の上を濡ら
し、床へと滴り落ちていた。

「隊長……こんなものが……。おそらく博士の手記かと思われます。」

吉田の差し出した皮製のカバーを纏った手帳を受け取る。

そして、全てを知ることとなる。

後にこの国を覆う巨悪の正体を……。

遡る事、更に一年前。

アメリカ合衆国、生物兵器研究に関する秘密研究施設。

地下深くに建設されたこの施設では、生物由来の毒素や細菌など

を用いた兵器の研究・開発が行われていた。

そこに務めていた日本人医学博士は、研究の最中とある新種の細菌を四つ同時に発見する。

それは各々が致死率九割五分を軽く超越した細菌であった。

単体でも充分強力な細菌兵器として使用出来ることは云うまでも無いが、これらの細菌には致命的な弱点が存在した。

それは超高温の熱である。

また一様に空気の流れ……即ち風にも弱かった。

ほんの少しでも風に触れると細菌は崩壊し、毒素を持たなくなってしまうた。

即ち兵器を用いた爆発の衝撃で飛散する事が不可能であるということであつた。

唯一の感染源は感染者同士の接触。

人間のみに有効であることが分かり、感染すれば即座に体中に広がる。

数日のうちにそれぞれ異なつた死体を生み出す。

ただし兵器としての有用性は、著しく低いと結論付けられることとなる。

博士は自分の研究の有用性を信じて疑わない、完璧主義者であつた。

しかし現実には、軍事転用できないその細菌に対して上層部が出した結論は研究の永久凍結だつた。

博士は日本への帰国を命じられ、日本政府系の研究施設に身を置くことになる。

アメリカからの帰国当日、博士は自分の研究室で手荷物を纏めていた。

そこである事に気付く。

凍結されたはずの細菌が培養容器に入つたままであることに。

そして研究者としての性に負けて、後に世界最悪の悪魔の元となるサンプルを日本へと持ち帰ってしまう。

彼はその細菌の弱点を克服するために、悪魔に魂を売る。

各地の裏病院や、研究者としてのコネクションを生かして生きた
ママの胎児を引き取っていく。

神をも恐れぬ人体実験が幕を開けた。

胎児たちを人工培養装置の中で育て、そして次々に細菌に感染させていった。

生き残った子供達に更に別の細菌を感染させていく。

淘汰されるべく者は淘汰され、生き残るべく者は生き残る……神
様も真つ青な人体実験は半年の後に四人の子供達を生んだ。

子供達は四つの細菌を違う順番で感染させた結果生存した被験児
だった。

どうやら最初の細菌に耐えられた者に対して、別の細菌をある一
定の順序で投与していくと最初に感染した細菌が拒否反応を起こし、
致死にいたる働きを抑制するらしい。

そして多くの犠牲を払って生まれたその子供達から作られたのが、
史上最悪の悪魔……四大元素細菌であった。

子供達の体内で混ざり合い、四つの異なる細菌の力を持った新た
な細菌は、まさしく致死率十割、完全なる殺人を可能とした。

当初目的としていた弱点の克服には至らなかったものの、博士の
目的は達成されてしまう。

これが四大元素細菌の正体であった。

「私は神を超えた存在を作り出してしまった。それは同時に悪魔だ
ということも私は分かっていた。おかしい話だと思いかもしれない
が、私はこの悪魔の細菌なんてもうどうでもいいとさえ思っている。
それくらい達成感に満ちている。まあ奇しくも自ら最初の感染者と
なってしまったのは、差し詰め天罰だろうか。唯一の願いがあると
すれば」

手記はここで途切れてしまう。

これが事の顛末であった。

史上最悪の細菌はたった一人の人間のエゴ、欲望、願望によって

作り出されてしまった。

そして、長い長い暗いトンネルへと人々を誘っていった。

（くそっ……たれが。）

大和は手記を読み終え、今は亡き博士に対して激昂した。

「うおおおおおおおおおお」

室内に大和の咆哮がこだます。

「たっ、隊長!？」

「木村……今すぐ本部に連絡を取れ。それから……この研究施設に出入りしていた人間、その家族、友人、知人、近隣の住民、利用していた商業施設やインフラ……くそっ、きりが無い。とにかく本部に繋いでくれ。」

「はっ、はい。」

人と人とが触れる機会はまだにも多い。

多くの部分で機械化や電子化が進んだ現代でさえ、それは変わらない事実だった。

帰宅時の抱擁、電車内での接触に荷物の受け渡し……数えればきりが無かった。

そしてその全ての接触機会において細菌の感染はほぼ絶対であった。

木村が連絡用の秘匿回線を繋ぐ。

「本部長……これから話す事は全て事実であると認識してください。事態は急を要します。」

今確認したことを全て話す……ある一点を除いて。

そしておそらくこの瞬間も感染は爆発的に広がっていることを告げた。

『山本……ご苦労だった。お前達も感染したと考えていいのか?』

「いえ、我々は幸い手袋にマスクを着用していましたので、おそら

く感染は防げたかと思われます。」

『そうか……無事でなによりだ。私はこれより防衛大臣及び、総理に連絡に事態を報告する。お前達は……済まないが数日そこで過ごしてもらつことになると思う。』

「わかつています。それよりも一刻も早い対処を。繰り返しになりますが、超高温の熱と風のみが細菌を死滅させる手段です。冷凍では、活動が休止するだけです。注意してください。では、失礼します。」

回線が途切れる。

「隊長……どうしてあの子供達のこと、黙っていたんですか？」

「吉田……手記の最後の一言、お前はあれ、なんだと思う？」

「!？」

「俺にはな、この子達のことよろしく頼むって見えたんだよ。この子達が無事であらんことをつてな。」

「しかし、この子達も感染者では？」

「それはないと思う。これは医師としての考察だが、普通感染者はみんな死んでいるだろ？だが、この子達の場合そうじゃない……恐らくオリジナルの四大元素細菌とは違うんだ。体内で混じりあった細菌は別のベクトルへと働き、この子達を生かした。俺はそう考えている。」

「でもこの風貌は……まさに感染者のそれと……同じですよ。」

確かに子供達は、姿かたちこそ違えど施設内に転がっている死体となんら変わりなかった。

小柄な男児は人工培養装置の薄緑色の液体の中で人間の形こそ保っているものの、ゼリー状になって存在していた。

一人の女児は今まさに燃え盛る炎に身を包まれていた。

大柄な男児はまるで大木のような固い皮膚に身を覆われていた。そして残る一人は、そこにいるのかどうかすらも判断出来なかった。

まさしく四大元素細菌の死亡状況のそれと同じ様な状況にありな

がら、どうやら子供達は同様に生きていらしかった。

「確かにそうだな……。じゃあ確かめてみる必要があるな。」

と云って大和は徐に小銃を肩から下ろすと、燃え盛る女兒が入った培養装置を叩き割った。

同時に液体が部屋の床を埋め尽くしていく。

「!？」

隊員達は驚愕した。

「たっ、隊長！？何してるんですか!？」

大和は隊員達を一瞥し、女兒を抱きかかえた。

不思議と燃え盛って炎は消え、女兒の姿は、恐らく一歳に手が届くかどうかの、至って健康そうな普通の赤ん坊そのものだった。

まだ薄い髪は美しい緋色をしており、どうあっても悪魔の細菌を身に宿した少女には思えなかった。

「という訳だ。どうせしばらく俺達はこちらから出ることも出来ない訳だから、ここで俺が死んだとしてもたいした問題じゃない。だったら、俺は賭けるぜ……。神様ってやつによ。」

慈愛に満ちた両腕で女兒を抱くのは、断固たる意思を持った一人の男だった。

「お前達は、部屋の外で施設からの外出許可が出るまで待機してろ。食料は三日分しかないが、尽きる頃には恐らく解放されるだろう。」

目覚しい戦果と功績を残しながらも『稀代の馬鹿』と称される自分達の隊長の本当の姿をはじめて知り、隊員たちは如何様にも表現しがたい感情を抱いていた。

そしてこれからどうするかも満足に決まらないままとりあえず部屋を出て、今日の過ごし方を考えるのだった。

（山本隊長……俺たちはこれからどうなるんですか？）

吉田は大和が一人居残った研究室の扉の前でうな垂れる。

研究施設に来てからちょうど三日が経過していた。

扉の向こうで大和が死んでいてもなんらおかしくは無かった。

食料は既に底を尽き、本部長からの連絡は一切無い。

感染ルートが感染者同士の接触である以上、施設内の食料に手をつけることは可能であるはずだが、現状それを可能にするほど博士の手記が正しいという保障はどこにもない。

吉田を含めた三人の隊員出来る事は、ただただ待つことだけだった。

「木村さん、皆川さん……俺たちこれからどうなっちゃうんですかね……？」

いくら鍛えられた自衛官——それも秘密工作部隊に選ばれるほど優秀な——であっても肉体的には既に限界を迎えていた。

なによりも、辺りに死体が転がっている施設内で五日も過ごしていては、いつ精神が崩壊してもおかしくなかった。

それを辛うじて繋ぎ止めていたのは、恐らく大和への強い信頼と精神的な支柱としての依存が大きいだろう。

「吉田……お前、その質問何回目だ？」

呼びかけられたうちの一人、木村という男性隊員が敢えて質問で返す。

「木村……今日で……今日だけで三回目だ。」

呼びかけられたうちのもう一人、皆川という女性隊員がその質問に答える。

「すいません。」

申し訳なさそうに、吉田は返した。

この部隊は、自衛隊の数ある秘密工作部隊の中でもかなり特殊な位置付けにあった。

一つは、能動的な武力行使が禁じられた自衛隊の中でも数少ない、先制的自衛権が認められていたこと。

そして国家、国民の不利益になりそうな近隣諸外国の工作活動に対して、独断での妨害工作が認められていたこと。

それ故、全国二十五万人の自衛官の中でもずば抜けて優秀な人材が集められていた。

吉田は弱冠二十二歳であるが、射撃訓練や対テロ活動訓練で抜群の成績を残す、若手のホープであった。

格闘戦を除く運動神経の良さに関しては、隊長の大和を上回っている。

木村は対工作活動は勿論であるが、電子工学や機械工学のスペシヤリストで部隊の武器調整や通信等を一手に引き受けていた。

また作戦立案能力や的確な状況判断でも部隊の活動を支えていた。皆川は元日本軍の暗号解読班の祖父とコンピュータソフトエンジニアの父を持ち、自身は元ウィザード級のハッカーという異色の経歴を持つ、対ネット工作のプロであった。

しかし、一見バラバラに見える各分野のエリート達を纏め上げる大和の才覚こそが、この部隊の最大の武器であり、特殊性であると言える。

その大和を扉一枚挟んだ場所に居て、何もできないというもどかしさが彼らの精神的苦痛をさらに高めていた。

（山本隊長……俺たちはこれからどうなるんですか？）

吉田は何度目になるかわからない質問を声に出さずに扉越しに投げかけ、またうな垂れるのであった。

表の世界の情報もまるで掴めない、隔離された研究施設に生まれる淀んだ空気は、これからの日本を示す縮図そのものだった。

ただただ俯き、現実から目を背けることでしかこの苦痛は拭えそうに無い。

隊員たちは、一刻も早い本部長からの連絡を待った。

過去【二】（前書き）

作者のおかむと申します。

以下の点に注意して読んで頂ければ幸いです。

・初投稿作品で、誤字・脱字・言葉遣い等におかしな点があるやもしれません。

↓指摘していただければ嬉しいです。

・SFを謳っていますが、そこまで科学的な知識に富んでいる訳ではないので、かなり拡大解釈等がありますのでご了承ください。

・この物語はフィクションなので、作中に登場する単語・場所・名称等は全て架空のものです。実在する名称と同様の表記でも一切の関連性はございませんので注意してください。

それでは作品のほうお楽しみいただければ幸いです。

過去【二】

大和達が研究施設から陸上自衛隊対テロ対策室本部長である、岩波へ連絡があつてから事態は大きく動いた。

「ですから大臣、事態は一刻を争います。緊急の移動制限とあらゆる産業の停止が必要です。」

大和から連絡を受けた岩波は、議員会館の鳩山防衛大臣の元を訪れていた。

しかし、連絡がつき会うことが出来たのは、報告を受けて既に三日が経過してからであつた。

大和からの報告を全て事実と認識し、早急な手を打つ必要があると判断しての行動にも関わらずだ。

「とはいってもだね……その、事実確認が取れてない段階で勝手な判断は……できないのだよ。うん、まずは兄さんに報告しないと……。あと、それからほら各省庁とかと調整しなきゃだし……業界の方々とかさ。」

「で・す・か・ら……それでは遅いと仰っているのです。今すぐ、大臣単独でも構わないので、非常事態宣言を発令して下さい。」

「いや、僕じゃ、そんな責任は負えないよ。」

「……では、総理に連絡をとってください。」

「あー、今日ゴルフって言ってたからな。プレイ中に電話したら怒られちゃうよ。」

（ツクそ……現場では、今まさに人が死んでいっているというのにこの体たらく……上がこれでは、話にならん。）

鳩山兄弟は、その祖父や父が時代の要職を担った大物政治家で、所謂孫議員と呼ばれていた。

親の七光りという物は大きな力を持っていて、兄である一郎は内閣総理大臣を、弟である二郎は防衛大臣を務めていた。

しかし政治的手腕に関しては、二人とも乏しいとしか言い様がな

かった。

また内閣の編成も、俗に『お友達内閣』と称されるように、政治的手腕や実績を無視して、親しい議員のみで構成されていた。

「わかりました。私のほうから総理に連絡をとってみます。失礼します。」

腸が煮えくり返る思いとは、まさにこの感情を持って以外表現できなかった。

シビリアン・コントロールの弊害をこれでもかと痛感し、岩波は独断で自衛隊を動かせないもどかしさを嫌というほど感じていた。

足早に防衛大臣の元を去ると、携帯電話を取り出した。

掛ける先は勿論、内閣総理大臣である鳩山一郎であった。

関東近郊某ゴルフクラブ

「もゝえもえもえ、きゅゝんきゅゝん！もゝえもっ」

深い緑と美しく刈り込まれた芝生が印象的なゴルフコースには、恐ろしく不釣り合いな深夜アニメのテーマソングが響く。

「ちつくしよう……こんな時に電話かよ。ビリーちゃん悪いんだけどちよつと出ていい？」

「カマイマセンヨ。」

「もしもし……ああ岩波君か。ちよつと僕ゴルフ中だから後に……えっ？細菌？ちよつとそういう難しい話は、緊急って言われてもな。じゃあ好きにしていから。え？緊急事態宣言を発令してって言われてもな、僕の独断じゃそんな無理だよ。」

電話越しの声が冷静なものから、怒鳴り声に近くなっていくのが周囲の人間ですら分かった。

「そんな怒鳴らないでよ……分かった、帰ったら閣議開くから。それまでは、何もしちゃだめだからね。」

と云ってさつと電話を切った。

「ごめんね、ビリーちゃん。さっ続きはじめよ。」

「ダイジョブデス。ソレヨリ、ナニカアツタンデス力？」

「なんか、細菌感染が止まらないから非常事態宣言を出して移動制限をかけるとか云うんだよ。そんなの無理に決まってるのに。」

（細菌……そういうえばそんな話があった気がするが、それにしてもこの国の国民は可哀想だな。こんな無能が総理大臣だって！？笑わせてくれる。」

「スイマセーン、デンワーノヤクソークガアルノーデ、カートニイツテキマス。」

「そう？なるべく早くしてね。僕のスーパーショット見てほしいからね。」

「ハロー。イソギマス。」

駐日アメリカ大使、ビリー・ワシントンは、カートに戻ると携帯電話を取り出した。

掛ける先はアメリカ合衆国大統領、ジョージ・ウィルキンソン。

「私です。大統領に至急お話したいことが。ええ大至急です。」

チラツと総理大臣の方を見るも、素振りを繰り返すだけでこちらに気を向けてはないようだ。

もしかしたらこれからの進展次第では、世界を動かす事態に発展するかもしれない。

「大統領、例の細菌を持ち出した日本人医学博士のことは覚えてらっしゃいますか？」

『ああ、確か例の施設から持ち出されたとかいう細菌のことか。まだ消息がつかめないそうだな……それがどうかしたのか？』

「はい。どうやら日本国内で感染が拡大しているようです。ですが、この国の『猿』総理は対処する気がないようです。事の運び次第では大きな戦争、或いは亡国の危機という線もあります。」

『極東防衛は、我が国永遠の課題だ。今、日本を東側陣営に奪われるのは、大きな痛手だ。』

「事がどう動くにせよ、これは同時に好機であります。恐らくこの

まま感染が拡大すれば、何れは我が国をはじめ諸国に救援を求めるでしょう。そうなれば……保護という名目の元、国家を掌握することとはそう難しくないはずです。勿論、我が国が主導権を握れるかどうかは、これからの戦略次第です。」

『なるほど……。確かに日本の抑える事は、極東防衛戦略においてこれ以上無い利点だ。私の方でも、水面下で動いてみよう。』

「ありがとうございます。私ももう少し詳しい情報を集めてみます。では失礼します。」

まさか電話の相手が合衆国大統領だとは、この場にいた誰一人として思わなかったであろう。

（一生、駐在大使止まりで終わりかと思っていたが、こんなビッグチャンスに巡り合えるとは……これだから猿の相手はやめられない。）

「ソウリ、シツレイシマシタ。サア、レッツエンジョイ。」

「よし、それじゃいつちょ狙っちゃうよ。」

まさに黒い陰謀に塗れた権力が動き出した瞬間だった。

無能な権力は、賢い権力によって動かされていく。

ただその賢さは、梟に代表されるのではなく、狐の方であったが……。

議員会館の廊下の床を革靴が叩く音が響く。

（まったくこの国の政治はどうかしている……四方やあそこまで能無しだとは。）

総理大臣への電話を切った岩波は、一行に進展しない事態に苛立ちを覚えた。

（ここは単独でも動くべきだろうか。こうしている間にも最近日は本中へ広まっているに違いない。）

「岩波君……岩波君かね？」

「麻野先生…… お久しぶりです。」

麻野太一は前防衛大臣で、外務大臣など国家の要職を度々務めた大物政治家であつた。

岩波とは防衛大臣時代に、親交を深めていた。

「どうしたんだね？ そんなに慌てて？」

話すべきかどうか迷っている余裕は無かつた。

事態は急を要する事、現状起こっていること全てを打ち明けた。

「今すぐにも手を打たなければ、この国は今にも崩壊してしまします。」

それは悲痛な叫びだつた。

「どうか、お力添えを。」

「岩波君、私は君を信賴している。だが、私は今や一人の国会議員に過ぎない。出来る事はそう多くは無いぞ。それでも良いと云うのならば力を貸そう。」

「浅野先生…… ありがとうございます。」

「で、具体的に策はあるのか？」

「私は、公には身を出せない人間です。先生には、表に出てこの事実を公表して欲しいのです。」

「それは、最悪の場合人が死ぬぞ。」

「もう何人も死んでいるんです。今はこの事実を知らせることしか我々に打てる手はありません。そしてその事実を知らせるには、できる限り国民の信賴を得ている人が必要なのです。」

語氣が自然と強くなる。

「わかつた。早急に記者会見を開こう。」

「ありがとうございます。私は、独断で管轄下にある部隊の指揮にあたります。」

「うむ。では、会見の場所が決まり次第また連絡する。」

「はい。失礼します。」

駐日アメリカ大使、ビリー・ワシントンと同国大統領、ジョージ・ウィルキンソンとの間で黒いやり取りが為されていたのと、時を

同じくしてここ国会議員会館の廊下において、それとは別の権力が動き出していた。

それは、亡国の危機を救うための重要な密約であった。権力の正しい使い方を分かる人間とそれを知って助けを求める人間との間で交わされたそのやり取りは、大きな動きとなってこの国を動かしていくことになる。

（あとは、彼らに一刻も早い連絡をしてやらねば……。）

岩波は今交わすことが出来た約束を胸にしまい、果たさねばならないもう一つの約束を果たすべく再び、先ほど総理大臣と通話したのは別の携帯電話を取り出し議員会館を足早に闊歩していく。

『ピーッピッピッピッピッピッピッピッピッ。』

秘匿回線からの着信を示すその音は、研究施設の廊下に響き渡った。

「はい。木村です。」

『岩波だ。遅くなってすまない。』

吉田が乱暴に通信端末の受話器を木村から奪った。

「もう三日も経ってるんですよ。一体どうなってるんですか？」

既に怒声にすら覇気が無い。

『本当に力不足で申し訳ない。各隊員は施設から退却し、一度本部に帰還して欲しい。』

「本部に帰還で……三日も放っておいてそりやないでしょう？」

吉田の悲痛な叫び声が施設内に響く。

隊員達の悲痛なまでの叫びは、岩波にも痛いほど伝わっていた。『だが、我々には時間が無いんだ。感染者は徐々に広がっている。マスコミもちらはらと気づきだしている。君達が現場から持ち帰る証拠無くして、国家は動かせない。』

「だからって……クソッ……分かりました。」

『申し訳ないが、別動部隊は送れない。自力で本部まで帰還して欲しい。手段は問わない。』

「……了解しました。」

岩波にとつても断腸の思い出の決断だった。

岩波の指揮下にある部隊は、情報収集や警戒任務をそれぞれ行っていた。

一刻の猶予もない現状で、大和達の部隊を迎えに行かせる余裕は無かった。

『では、本部にて待っている。』

回線が切断される。

「クソッ」

「吉田……冷静になれ。私達にはまだやる事があるぞ。まずは隊長に知らせよう。」

吉田の言葉は隊員達の代弁だった。

だから、木村も皆川も敢えて止めなかった。

そして皆川の言葉の通り今為すべき事は、目の前の扉を開ける事だった。

「隊長、失礼します。」

木村の呼びかけに対して、大和からの返事は無い。

三日前に閉じられた木目の美しい扉が再び開く。

「たい……ちよう？隊長おおおお」

扉を開けた隊員達の目に飛び込んできたのは、机に突っ伏したまま微動だにしない大和の姿だった。

「たいちよおおおおおお」

膝を着き吉田が絶叫する。

「うつ……うああああああああああああんん」

木村と皆川はぎゅっと唇を噛み締める。

「えっ……うえええええええええええん」

（ん？）

泣き声が増える。

「うつうつん腹減ったああああ。」

声が一つ増える。

（え？）

「おお、お前ら。施設からの退却許可は出たのか？」

「たっ……隊長、生きてるん……ですか？」

「当たり前だろ。俺を誰だと思ってんだよ。まったく吉田が騒ぐから泣き出しちゃったじゃねーか。」

そう云う大和の足元には、緋色の髪をした赤ん坊が座って泣いていた。

「賭けは俺の勝ちみたいだな。」

にやりとした大和は、勝ち誇ったように自らの部下達を見渡した。

「まったく……あんたって人は、殺しても死なないね。」

皆川は鼻を噉り、笑顔を送り返した。

「ほんとに。よくぞご無事で。」

木村は目頭を押さえ呟いた。

「たいちよおおおおおおお」

吉田は緊張の糸が切れたのか、またわんわんと泣き出した。

「吉田はしょうがねえな。木村、首尾はどうなった？」

「はい。本部長から帰還の命が下っています。」

「帰還か……。その前にこいつらをどうするかだな。」

「本部には知らせないのですか？」

「ああ。こいつらの存在を本部に知らせると、恐らく研究の後、殺されちまうからな。」

「では……どうするんですか？」

（子供達を安全かつ秘密裏に保護できて、尚且つ治療の方向性をさぐるとなると……。）

「うーん。木村も皆川もまだ独身だったよな？」

「えっ、何ですか急に？」

「お前ら悪いけど、一人ずつ育ててもらいたいんだけど。」

「！？」

「そういうこと。」

「皆川は察しがいいな。この子達はおそらく細菌を体内に保持しているが、それは他者には感染しない。しかも肉体の状態変化を維持したまま生存出来るってことだ。この子達を安全かつ秘密裏に保護するには、この事実を知っている俺たちが育てるしかないってことだ。」

「しかし、いくらなんでも無茶じゃないですか？」

泣き止んだ吉田が話に参加してくる。

「お前には頼んでねえよ。」

「そういう事じゃなくて……」

「お前はまだ若い。この子達を任せるには若すぎる。」

「年齢に関しては若いって云っても木村さんも皆川さんも僕と三つしか変わらないっすよ？それよりも木村さんも皆川さんもこれから結婚とか考えてるんじゃないのかってことです。」

吉田の疑問にも一理あった。

「吉田……私は本来ならネット犯罪に関する懲役刑が数十年あつてもおかしくない人間だ。恩赦の見返りが、この部隊における活動ってのは前に話した通りだ。」

「俺も同じようなもんだ。今までの任務で何人殺したかわからない。今更結婚なんかしようと思わないよ。」

吉田には返す言葉がなかった。

「吉田……お前に人間を相手に引き金を引く勇氣はあるか？俺たちは皆そういう十字架を背負って生きてるんだ。お前にはまだ掴める未来も見れる夢もあるってことだ。その上子供を育てるなんて重荷を背負わせられるかって事だ。」

大和の言葉が重く響く。

「木村、皆川……すまないが、頼めるか？」

答えは聞くまでもなかったようだ。

「そうと決まれば、私はこの水の子を預かるう。」

皆川はゼリー状になった男児の入った培養装置を小銃で叩き割っ

た。

薄緑色の液体が、部屋の床に広がる。

「俺は、この木みたいな子供を。」

同じようにして木村は皮膚が硬化した大柄な男児の入った培養装置を破壊した。

二人は同じようにして子供を抱きかかえると、不思議な感覚に包まれたように微笑みあった。

水泡化の症状を負った子供は、端正な顔立ちに細い目をしていた。皮膚の硬化の症状を負った子供は、頬を赤く染めて優しそうな顔を木村に向けていた。

「それじゃ俺はこの緋色の髪の子と、もう一人か。」

大和が目を向けた培養容器は、確かに何かがいるがそこには何も見えなかった。

ただ時折気泡が生まれては装置の上面へと浮いていく。

『検体D』と書かれたプレートが付けられたこの培養装置の中には確かに何かが生きている。

大和は最初の時と同じように、培養装置を叩き割った。

ガラスの割れる大きな音と共に中から姿を現したのは、本当に普通の可愛らしい赤ん坊だった。

それぞれが四大元素細菌の大元となる細菌を身に宿した悪魔の子であり、同時にそれは赤ん坊が等しくそうであるように、まさしく天使の子でもあった。

「名前……つけてあげませんか？」

吉田が子供を抱く三人に提案する。

皆川は、抱きかかえた子供が入っていた培養装置に目を向ける。
印された文字は『検体M』。

「まもる……この子は皆川葵だ。」

「良い名前ですね。木村さんは？」

木村も同じようにして培養装置に目を向ける。

印された文字は『検体Y』。

「決めた。この子には優しくそだって欲しいという願いを込めて、ゆうじ……木村優治だ。」

大和はどうにも考えが纏まらなかった。それは、一つの不安を意味していた。

急に兄弟でもない子供を二人も育てるとなると、当然周囲の反応も大きく変化する。

ましてや誰にもこの秘密を知られてはならない。

「俺は……もう少し考えさせてくれ。」

「そうっすか。」

「それよりこれからの事を先に話しておく。まず俺と木村、皆川は本部には戻らず俺の家へ直行する。幸い、子供達の俗に言う健康状態に異常はなさそうだが不安もある。病院へは行けないから俺の家でしばらく様子を見ることになるだろう。」

賢明かつ最善の判断であろう。

「本部へは、吉田が先行して戻り状況を報告。とにかく時間を稼げ。その間に皆川は、出生届や戸籍の改竄をもらう。木村は俺と皆川のサポートを頼む。」

現状打てる最善の手。

子供達を守り抜く上で、可能な限りの術。

隊員たちも大和の立案に反論はなかった。

「よし。そうと決まれば、後は俺の名付けだけだな……女子の方は……」

最初に叩き割った方の培養装置に付けられたプレートには『検体

K』の印字。

「きょうこ……名前は京子だ。姓は火山。」

「姓は山本じゃないんですか？」

「急に子供が二人も増えるのは、あからさまに不自然すぎるからな。俺は死別した元同胞達から一文字貰って性にすることにする。」

「なるほど。」

「男の子の方は、大輔……宮本大輔だ。」

不意に男児は微笑んだ。

「この子笑ってますよ。」

その笑顔は、自らに課せられたあまりにも重過ぎる枷などまるで知らない。

その笑顔は、これから訪れる数々の試練など何も知らない。
知っているのは、その日みた男の顔をこれからもずっと見ていく
ということ。

それでも大和には、その笑顔が未来への希望を示しているように
思えてしかたなかった。

「さあ、行こう。戦いはこれからだ。」

山本大和率いる、自衛隊の秘密工作部隊の隊員達は、全ての始まりである研究室を後にした。

これから待ち受ける現実など何も知る由もなく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1292y/>

進め！北区中央図書館レジスタンス

2011年11月3日07時10分発行